細井肇の和訳『海游録』
―大正期日本人の朝鮮観分析をめぐる断章

池内 敏

はじめに

日本人の朝鮮観一般を論じることはたいへんに難しい。その歴史的変遷を追究する場合にあっても、どのような史資料を素材にして論じるか／論じうるかからして大問題である。

筆者はかつて「鮮人考」と題する論考[1]のなかで、「鮮人」なる言葉遣いをめぐる朝鮮観研究について批判的に検討をしたことがある。拙稿の前には「鮮人」を朝鮮人蔑視の言葉としてのみ把握する先行研究が少なからず存在した。その最も古い部類に属する研究は、大正期の新聞紙における「鮮人」用語の現れ方などから日本の植民地支配の始まりと「鮮人」用語の使用開始を密接なものと理解し、そこに「鮮人」なる語に朝鮮蔑視観が込められた由縁を見いだした。これに対し、「鮮人」用語の使用例を豊臣秀吉による朝鮮侵略戦争時の従軍日記に見出した研究は、「鮮人」用語に体現された朝鮮人蔑視は植民地支配の時期をはるかに遡ると主張した。

これら先行研究に対する卑見については拙稿を参照していただくことにしたいが、同稿のなかで筆者は大正期の知識人である細井肇に少しだけ触れた(前掲拙著第六章の注(12))。次に引用するのは、その全文である。

> 大正期を生きた「朝鮮通」細井肇は、日常的に朝鮮服を着用し、「不逞鮮人」なる語を一切排除することを宣言したという。その著述内容から細井の朝鮮認識を分析した欄木寿男は、「朝鮮通」の彼にしても朝鮮蔑視観を脱し切れていたか疑問が残る旨を述べている(欄木寿男[一九六五])。「鮮」系用語の不使用が朝鮮蔑視と無関係だとはいい切れない。

この記述それ自体は、欄木寿男の仕事[2]だけに依拠することで、同時代の柳宗悦や浅川巧[3]に対するのと同様な期待感を込めた細井に対する甘い評価であったと、現時点では考えざるを得ない。細井を論じたもので欄木のあとに現れたものは、いずれも細井を厳しく批判することで共通する[4]。本稿は、こうした細井に対する評価に異議を唱えるものではないが、細井の残した作品の評価についてささやかな考察を試みるものである。

1
拙著『大君外交と「武威」』(名古屋大学出版会、2006年)第六章。なお、初出は『歴史の理論と教育』109号(名古屋歴史科学研究会、2001年)だが、拙著収録に際して拙稿「日本人の朝鮮観を捉える視角」『歴史評論』602号(2000年)と併せて改稿した。

2
欄木寿男「大正期における朝鮮観の一典型」『法政大学近代史研究会会報』8、1965年

3
柳宗悦や浅川巧については、高崎宗司『妄言の原型―日本人の朝鮮観』(木犀社、1990年。本稿では2002年刊行の増補第三版第一刷による)。同書では既に細井肇を「朝鮮総督府の統治政策に協力した代表的な御用言論人である」と断罪している。

4
青野正明「細井肇の朝鮮観―日本認識との関連から―」(『韓』110号、1988年)、高崎宗司「朝鮮民族性悪論　細井肇」同・前掲『妄言の原型』第10章。

1. 細井肇の評価と研究

細井肇(1886–1934)は、独学で成城中学に編入学・中退をし、電気通信技術伝習所を経て1906年に長崎新報社の記者となった。この間、彼は労働運動に関心を寄せ、当局からは社会主義者として常に監視された。やがて朝鮮へ渡って10年には『現代漢城の風雲と名士』を著述し、11年には朝鮮研究会の創設に関与して朝鮮古書の和訳も盛んに行い始めた。13–18年には東京朝日新聞社記者となり、19年に朝鮮で起こった三一独立運動を機に朝鮮への傾倒を更に深め、20年には朝鮮関係書籍刊行会社として自由討究社を設立した。細井は、京城と東京とを往復しながら自由討究社を拠点にして、「通俗朝鮮文庫」シリーズや「鮮満叢書」シリーズで朝鮮古典の翻訳を次々に刊行した。23年関東大震災時の朝鮮人虐殺事件に際しては、細井も東京で朝鮮人に間違われて殺されかけた。この体験をもとに細井は日本人と朝鮮人の関係悪化を憂え、日本と朝鮮各地の巡回講演に出かけ、講演回数256、のべ聴講者数12万余を数えたという(本稿注(4)高崎宗司の仕事による)。

高崎宗司によれば、韓国併合ころの細井の朝鮮論は、①併合が朝鮮人の賛意のもとに行われ、②併合は歴史的必然であったものと理解し、③日本人による朝鮮統治を円滑に進められるよう朝鮮についての情報提供を行う意図をもつ、という三つの特徴が指摘できるという。また、三一独立運動後の著述には、④朝鮮人には独立する能力が無く、⑤独立運動家たちは「独立運動業者」である。一方、⑥朝鮮総督府による文化政治には意義があり、⑦朝鮮人の歴史的「心性」が併合を必然化し、⑧朝鮮人に内地人同様の権利を与える内地延長主義は誤りであると主張する、という五つの特徴が指摘できるという。その上で、細井が自由討究社で盛んに刊行した朝鮮古典の翻訳シリーズは、朝鮮人を統治する前提として朝鮮人の民族性を問題とした作品群だと評価する。したがって、細井による一連の作品群のうち『鮮満叢書』についても「朝鮮民族をけなし、日本の統治を正当化する」と見なされた。そして、これら細井の作品は、三一独立運動を契機にして武断主義的政治を文化主義的政治へと転換させた朝鮮総督斎藤実へと「身売り」をして成し遂げられたものと断罪される。斎藤実文書(国立国会図書館憲政資料室所蔵)に含まれた細井肇の斎藤あて書簡を通覧した高崎は、その書簡の特徴を「斎藤から毎月届けられる金に対する感謝と、何かにつけての無心である」と述べ、「斎藤のお墨付きこそなかったものの、終始一貫して、総督府宣伝局の役割を民間で果たしていた」と厳しく指摘する。

一方、1997年から順不同で刊行の始まった「明治人による近代朝鮮論　影印叢書」シリーズ20巻(ぺりかん社)は現在までに七点の刊行を終えているが、その中に細井肇のものが三点含まれている。「現代漢城の風雲と名士」(1910年・

第17巻・森山茂徳解説、1997年)、「国太公の眦」(1929年・第8巻・木村幹解説、2000年)、「女王閔妃」(1931年・第9巻・同前、2000年)、である。

これらに付された解説のなかで、森山茂徳は細井を「新聞記者・評論家」と紹介し、「日本の朝鮮統治政策について、当時の斎藤実総督に多くの進言をしている。」と述べる。そして「現代漢城の風雲と名士」と朝鮮総督府編「朝鮮貴族略歴」(1925年)の記述とが多く一致することを指摘し、細井が「日本の朝鮮統治に一定の役割を果たした」と見るのである。これに対して木村幹は細井を「日本における朝鮮ウォッチャーの草分け的存在」とし、細井は「終始一貫して…アジア主義の立場から、日本政府や総督府の政策を批判し続けた」と記す(前記第8巻解説)。木村はまた、前記第9巻で影印に付された「女王閔妃」の執筆動機を李容九の業績再評価にあると見る。李容九は、日本政府や朝鮮総督府とは一線を画しながら韓国併合を進めた韓国側人物であり、親日団体一進会会長であった。韓国併合後の一進会は朝鮮総督府から警戒・迫害され、李容九もまた不遇な晩年を過ごさざるを得なかった。そうした李容九の再評価は「日本政府と総督府の朝鮮支配に対して、アジア主義の立場から公然たる反対の意思を表明することを意味していた」と木村は見る(前記第9巻解説)。こうした木村による細井評は高崎のそれと正反対であるかにも見えるが、木村が「近代朝鮮史を大院君と閔妃の間の政治的闘争を中心として理解すること、その歴史観自身、細井等が中心となってあみ出して来たものであった」として細井の歴史観克服を必須と述べる点に鑑みると、木村・高崎の評価はさほど対立するものでもない。細井が韓国併合を必然であったと見る最大の論拠は、朝鮮支配層における政治闘争の繰り返しの歴史が朝鮮史の特徴であったとみる史観があったと、高崎も見ているからである。

さて、表1は細井肇「国太公の眦」(1929年)に付された巻末広告に掲載された細井の著作目録であり、同様にして表2は細井肇による翻訳書(朝鮮古書)の目録である。1929年時点でのものとなるが、いわば細井自身の手で整理された著作・翻訳書目録である。李在烹が国立国会図書館(日本)と国立中央図書館(韓国)で確認した細井肇の著作は、表1・2に挙げたものに加えて、「朝鮮統治の根本的変更に関する意見書」(1924年)・「朝鮮物語」(1931年)・「日本の決意」(1931年)などが挙げられている[5]。これらによって、細井が、その50年に満たない生涯に、10編前後の著述と20点以上の朝鮮古典の日本語訳を行ったことが知られるのである。

高崎宗司による細井評価は先述の通りだが、それは、たとえば韓国併合前後の時期については、「漢城の風雲と名士」「朝鮮文化史論」という二つの著作及び1910年に発表された二つの随筆を通読しての分析である。また、三一独立運動後の著述の分析は、具体的には二つの著作「内鮮人の本務」「鮮満の経営」と1920年・21年に書かれた二つの随筆に依拠している。一方、細井に

5
李在烹「細井肇抄訳本『海游録』」『韓日関係史研究』47、2014年(ソウル)

表1　細井肇著作目録

1	漢城の風雲と名士	1910年	日韓書房（京城）
2	朝鮮文化史論	1911年	朝鮮研究会（京城）
3	政争と党弊	1914年	益進会（東京）
4	閥族罪悪史	1919年	大鐙閣（東京）
5	支那を観て	1919年	成蹊堂（東京）
6	内鮮人の本務	1920年	自由討究社（京城）
7	鮮満の経営	1921年	自由討究社（京城）
8	朝鮮文学傑作集	1924年	亜細亜文化連盟協会（東京）
9	朝鮮問題の帰趨	1925年	亜細亜文化連盟協会（東京）
10	黎明の朝鮮	1925年	自由討究社（京城）
11	三国会議の真相	1927年	平凡社（東京）

〔典拠〕細井肇「国太公の眦」（1929年）に付された巻末広告による（「明治人による近代朝鮮論　影印叢書」第8巻）。なお、同著巻末に付された別の広告によれば、上記7～9はいずれも自由討究社発行による同一書名が見える。そのうちの「朝鮮文学傑作集」広告によれば、収録された作品名が以下の通り列挙されている。春香伝、燕の脚、秋風感別曲、九雲夢、春香伝（衍ヵ）、沈清伝、謝氏南征記、薔花紅蓮伝、南香太平歌、雲英伝。

表2
細井肇翻訳書（朝鮮古書）目録

牧民心書
荘陵誌・謝氏南征記
朋党士の検討・九雲夢
朝鮮歳時記・広寒楼記
懲瑟録・南薫太平歌
丙子日記
洪吉童伝
八域誌・大韓地誌
瀋陽日記
雅言覚非
燕の脚
海游録
侍天教の教旨
三国遺事
鄭鑑録
昼永編
五百年奇譚

〔典拠〕表1に同じ。

よる朝鮮古典の翻訳については、高崎は「通俗朝鮮文庫」「鮮満叢書」「朝鮮文学傑作集」「朝鮮物語」を挙げながら、それらを刊行した意図を問うている。ただし、それら「文庫」「叢書」「傑作集」に収載された作品のひとつひとつに分け入った分析ではなく、「文庫」「叢書」「傑作集」冒頭に付された「序言」に見える細井の刊行意図、あるいは個別の古典作品に付された細井の解説を通覧しての分析となっている。青野正明も「細井の朝鮮古書の翻訳・出版事業は、日本人に朝鮮人が統治しやすい無能な民族であることを理解させようとする意図の下で行われた」と述べる（本稿注（4）青野論文）が、青野の場合も個別の作品を読み込んでの分析ではない。

これに対し、近年の韓国では、細井によって日本語訳された朝鮮の古典作品について、ひとつひとつに分け入った分析が始まっている[6]。ただし、それは現在のところ、青野や高崎によって示された枠組みを、個別の翻訳事例に則して追認する傾きがあるように思われる。そこで以下では、細井によって抄訳された、享保4年（1719）朝鮮信使に製述官として随行した申維翰の使行録『海游録』を取り上げて検討してみたい。

6
尹素英「細井肇の朝鮮認識と『帝国の夢』」『韓国近現代史研究』45、2008年（ソウル）、朴相鉉「翻訳によって発見された『朝鮮人』―自由討究社の朝鮮古書翻訳を中心に―」『日本文化学報』46、2010年（ソウル）、朴相鉉「細井肇の日本語翻訳本『薔花紅蓮伝』研究」『日本文化研究』37、2011年（ソウル）。

2.『海游録』の和訳

回答兼刷還使とよばれた時期を含め、江戸時代に12回派遣された朝鮮信使の使行録(随員による往来にわたる日記)は現在30点を越えるものが伝来する。それらのなかでも申維翰『海游録』は使行録中の白眉と言われ、これまでに数々の現代語訳がなされてきた。李在烹によれば(本稿注(5))現代語訳は11種類に及ぶというが、おそらく和訳・韓国語訳双方を含めての数だろう。和訳は、青柳綱太郎(1915年)[7]、細井肇(1922年)[8]、姜在彦(1974年)[9]のものが現在知られており(以下、それぞれ青柳本、細井本、姜在彦本と略して示す)、分量はそれぞれに差異があるもののいずれも抄訳である。全訳されたことはこれまでに無い[10]。

細井本については、高崎が簡単に言及する[11]ほかは、本稿注(5)の李在烹論文が唯一の先行研究である。李在烹によれば、細井本は、ごく一部の例外を除き、青柳本を底本にした翻案だと指摘する。つまり、細井本は申維翰『海游録』の原本から直接に和訳したのではなく、青柳本が漢文の書き下し調だったのを更に読みやすい日本語に書き直したものだという。それは訳語・訳文の共通性、とりわけ青柳本による誤記・誤読がそのまま細井本に転写されていることから明らかだという。ここで、仮に高崎による「朝鮮民族をけなし、日本の統治を正当化する」のが細井『鮮満叢書』編纂の目的であったとし、『鮮満叢書』に採録された申維翰『海游録』もその一翼を担わされたのだとしよう。しかし細井の翻訳した申維翰『海游録』が青柳本の翻案に過ぎないのだとすれば、細井の意図は細井だけのものではなく、青柳たちをも含めて論じられる必要に迫られる[12]。青柳本と異なる細井本の独自性はどこに見いだされうるのだろうか。

李在烹によれば、青柳本と細井本の大きな違いは、第一に、後者には各所に注記が付されて読者の理解を助けている点にある。それは、年代や時代背景に関する補足説明だったり、日常は使わない難解な用語の解説であったりする。第二に、申維翰の感情を細井が文章として整理した部分があるという。そこには細井の主観が交えられ、それによって意味を変容させられた部分もあるという。しかしながら、そこで挙げられた具体例は、いずれも「朝鮮民族をけなし、日本の統治を正当化する」ような変更をともなう事例ではない。そうした変更に属する事例として挙げられたのは、次のようなものである。

李在烹は、細井本では申維翰が朝鮮文士としてもっていた自尊心にかかわる記述が削除されていると述べる。細井本は青柳本に掲載されていた漢詩文のほとんどを削除しており、そうした詩文の削除は申維翰の描写法や風流文人としての風雅を台無しにするものだと指摘する。また、申維翰が文士として認知されるに足るような談論の場面は全面的に削除される一方で、日本や日本人に対して否定的な評価を述べた部分はほとんどそのままに残されているという。

7
青柳綱太郎『原文和訳対照　海游録』1915年、朝鮮研究会(朝鮮研究会古書珍書刊行第二期第十三輯)

8
細井肇抄訳『海游録』1922年、自由討究社。なお本稿では上巻・下巻が合本された朝鮮研究叢書第八巻(1926年)でその内容を検討したので、引用頁数も後者による。

9
姜在彦訳注『海游録　朝鮮通信使の日本紀行』1974年、平凡社東洋文庫252

10
細井本は細井自らが抄訳と称しており、その底本となった青柳本もまた抄訳であることは李在烹(本稿注(5))が明らかにしたところである。姜在彦本は、青柳本・細井本に比べて分量が約1.4倍強に膨らんでいるものの全訳ではない。同本に訳し落とした部分が少なくないことは、拙著(本稿注(1))でも指摘したことがあるが、朝鮮信使研究に造詣の深い田代和生、ロナルド・トビ両先生からも同趣旨の教示を得たことがある。

11
高崎は、「『鮮満叢書』も、朝鮮民族をけなし、日本の統治を正当化するところに、その目的を置いていた。」と述べたあと、「鮮満叢書」の第一巻・第二巻に収載された細井抄訳『海游録』に言及して、以下のように述べる。「また、申維翰『海游録』についても、「現代の朝鮮人にも此癖があるが、非常に猜疑心深い心情が所々に顕れて居る」点と、申維翰の「識見の絶無」とが強調されている。」(高崎前掲書215頁)。

12
崔惠珠「日帝強占下、青柳綱太郎の朝鮮史研究と『内鮮一家論』」『韓国民族運動史研究』49、2006年(ソウル)

細井は、朝鮮の両班層は無能かつ党派的で百姓から収奪するばかりの存在だと考えており、それゆえにこそ朝鮮は滅亡せざるを得なかったと見なしている。細井本の申維翰にはそうした両班像が投影されており、そうした両班観が読者に了解されるように細井本が構成されているのだと主張する。

ところで、表3は青柳本に掲載された漢詩文が、細井本で省略したことを明記して省略したもの(①)、細井本で省略したことを明記せずに省略したもの(②)、省略されずに細井本にも掲載されたもの(③)に分類して整理したものである。この表によれば、「細井本は青柳本に掲載されていた漢詩文のほとんどを削除した」などとは決して言えず、省略されたものと省略されなかったものとの違いには明瞭な特徴がある。それは、省略された漢詩文は、省略されなかったものに比べて分量が多い(行数が長い)という事実である。そして、分量が多いながらも残された漢詩文等がいくつか例外的に見えるが、それらは正月2日分を除けば全て青柳による意訳か注記が付されたものばかりである。つまり、漢詩文の削除は、本文(日記の地の文)の進行を妨げるような長文のものは、意訳や注記が無い限りは読者の理解を妨げるものとして削除されたと考えられるのである。唯一解説もなく意訳もない長文の漢詩が載せられた正月2日は、帰国の途についた朝鮮信使一行が、ついに対馬島を離れて朝鮮半島へと漕ぎだしたときに詠まれた『海游録』最後の漢詩文である。漢詩文の削除は、申維翰の文人としての風雅を台無しにする意図に発するものなどでは無い[13]。

13
姜在彦本は、冒頭の凡例で以下のごとく漢詩文の省略を明確に述べる。「『海游録』には…各体各様の漢詩がじつに多く挿入され、ときには一ヶ所だけでも数十首に及ぶことがあるが、煩雑を避けるために、行文の中にあるもののほかは省略した。」1970年代以後の朝鮮信使ブームを牽引した一人である姜在彦が、わざわざ申維翰を貶めるために漢詩文を省略したと、誰が主張するであろうか。

表3　青柳本と細井本における漢詩文の異同

①省略したことを明記するもの
5月18日・13行(6–7頁)、6月6日・13行(11頁／祭告祝文)
6月23日・10行(18–19頁)、6月27日・20行(26–27頁)
7月19日・7行(50–51頁)
②明記せずに省略したもの
6月24日・8行(20頁)、6月25日・7行(23頁)
8月8日・17行＋5行＋4行(57–59頁)
8月10日・16行＋8行＋11行(64–66頁)
9月1日・5行(83頁)、9月23日・22行(124–126頁)
8月18日・4行＋6行(74–75頁)
③省略しなかったもの
6月6日・2行＋4行(12頁)、6月21日・4行(17頁)
7月17日・19行＋9行(44–46頁／曲／青柳による意訳あり)
8月3日・2行(56頁)、8月18日・8行(80–81頁)、8月26日・2行(77頁)
8月29日・2行(81頁)、9月5日・40行(99–101頁／青柳の注記あり)
9月5日・19行(102–103頁／男娼詞／青柳の注記あり)
11月3日・2行＋2行＋2行(167、168、170頁)
11月14日・7行(173–174頁)、11月22日・2行(177頁)
12月9日・7行(187頁)、正月1日・2行(188頁)
正月2日・14行(189–190頁)

〔凡例〕出所検索の便宜のために、当該漢詩文の掲載位置を『海游録』の日付で示し、「・」を挟んで省略された詩文の行数を示し(詩文が複数のかたまりに分かれるときは＋で区別する)、併せて(　)内に当該日付を青柳本の頁数で示す。

また、申維翰『海游録』が朝鮮信使使行録の白眉とされ声価を高めたのは、申維翰と日本文人との数々の談論場面であり、とりわけ雨森芳洲とのそれである。対馬藩主に対する礼をめぐる申維翰と雨森芳洲との争論(細井本43–44頁)、京都大仏への参詣をめぐる申維翰と雨森芳洲の議論(83頁～)を筆頭に、印象深い談論場面・詩文贈答場面はおよそ洩れなく細井本に掲載されている(39頁、69–70頁、73頁、87–88頁、113頁～、108頁)。李在烹は、何か重大な勘違いをしているのではないか。

李在烹は、細井が和訳した朝鮮の古小説「薔花紅蓮伝」を分析した先行研究(本稿注(6)朴相鉉「細井肇の日本語翻訳本『薔花紅蓮伝』研究」など)を踏まえて、細井の和訳には、修正・潤色・省略という技法を通じて否定的な描写へと改作をする特徴があり、それは「童話の類だけでなく歴史的史料にも、こうした問題が生じていたことが分かるのだ。」と論文を締めくくる。しかしながら、李在烹が細井本『海游録』に探し出そうとした朝鮮人を貶めるような意図に発する「修正・潤色・省略という技法」は、いずれも実証不可能である。先行研究を意識しすぎた結果、実証と結論とが整合性を持ち得なくなったように感じられてならない。歴史的史料には細井の技法が及ばなかったとすべきである。

おわりに

それでは、本稿注(11)で引用した高崎宗司による申維翰『海游録』評を、どのように受け止めるべきだろうか。既述の通り、細井が申維翰『海游録』について「現代の朝鮮人にも此癖があるが、非常に猜疑心深い心情が所々に顕れて居る」と述べている点と、申維翰の「識見の絶無」を強調しているところに、高崎は注目している。それら細井の発言に申維翰『海游録』を貶める意図を看取しているのである。それは要するに、高崎は、細井本『海游録』の中身を読まずに、冒頭に付された細井の「海游録を訳了して」だけに依拠して評価を下しているに過ぎないということではなかろうか。

「海游録を訳了して」には申維翰『海游録』に対する肯定・否定の両様に取れる記述が散在しているが、全体としてはたしかに否定的な評価になっているのだろう。たとえば冒頭にこんな記述がある。「日本へ使した者の手に成った紀行文は頗る多いが、此の海游録ほど能文達筆を以て書かれたものは、恐らくあるまいと思ふ。文字に富み詩想に豊かなことは、訳して居てもツクヅクと感佩に勝えなかった。李朝文士中稀に見る好箇の文士である。」しかし、すぐに引き続いて「申維翰が好箇の文士であるといふ以上又は以外に何者もなかった」「単なる紀行文を草することに絶妙の手腕を有した筆マメな文士といふに止まる」という。そして「現代の朝鮮人にも此癖があるが、非常に猜疑深い心性が所々

に顕はれて居る」としながら「小才の利いた鋭い観察がひらめいて見へる」「適正なる批評又は観察と云はねばならぬ」とも評価する。あるいは「浪華において、江戸において、武備要害の堅固に一々驚歎して居ながら、毫も自国の文弱を省察した跡なく、唯だ倭俗を軽侮冷笑するのみなのは、外国に使した者としては識見の絶無を憐れまざるをえない」ともいう。

かつて日韓の善隣友好の姿をたずねて朝鮮信使研究を活性化しようとした辛基秀・姜在彦らは、ついに1970年代に朝鮮信使ブームを巻き起こすに至った。姜在彦本『海游録』の刊行はそうした動向に促されてのものであり、そこで和訳された内容は青柳本と細井本の延長線上に位置することが明らかである。細井本『海游録』もまた、そうした目で眺めれば豊かな内容に溢れていると見なさざるを得ない。

細井の『海游録』評価は低いものに止まった。それは、細井が当時迫られていた日韓関係の現状と照らしたときに申維翰の観察眼を不足に感じたから、そうなったまでである。そして、細井の「海游録を訳了して」しか読まなかった者にとっては細井本『海游録』は朝鮮人を貶める読み物に映ったかもしれないが、精読した者にはまた違った世界が見えたかもしれないのである。